

青年期女子の愛着スタイルと情緒的応答性の関連

宮本 邦雄・安田 藍⁽¹⁾

問題と目的

乳幼児期の愛着関係は、母親への接近と近接の維持という行動レベルの個人差にあらわれるが、その後発達に伴い内在化され、象徴レベルの個人差として維持される。愛着の生涯発達における中心概念が愛着の内的作業モデル (Internal Working Models; IWM) である。Bowlby (1973) によると、内的作業モデルは、「自分は愛着対象から愛される価値のある存在か」という自己モデルと「愛着対象は自分を保護してくれるか」という他者モデルとからなり、繰り返された愛着対象との相互作用をとおして一般化・抽象化された自己と他者の期待や信念を含んでいる。こうした内的作業モデルの構造について、Collins & Read (1994) は階層的ネットワークモデルを提唱した。これによると、まず一般的な自己と他者との愛着関係の表象が最上位に位置し、その下に親子関係・仲間関係・恋愛関係といった領域固有的なモデル、さらにその下には特定の相手に関係した関係固有的モデルが配置されている。このモデルは、対人相互作用の準拠枠として働き、対人認知や情動制御、さらに社会的適応に影響することが報告されてきた (金政・大坊, 2001; 宮本, 2006 他)。

一方、Main, Kaplan, & Cassidy (1985) が、親に対する成人愛着面接によって測定された愛着スタイル (自律型、軽視型、とらわれ型、未解決型) とその子どものストレンジシチュエーション法によって分類された愛着スタイル (安定型、回避型、アンビバレント型、無秩序型) の間に一貫した関連を報告してから、多くの研究が親と子の愛着の対応関係を見いだしてきた。van IJzendoorn (1995) の 13 サンプル (n=661) のメタ分析によると、3分類法 (子ども/親で、安定/自律、回避/軽視、抵抗/

とらわれ) では 70% の一致率、4 分類法 (子どもの無秩序・無方向と親の未解決・無秩序を含む) で 63% の一致率が示されている。

こうした親の愛着スタイルと子どもの愛着安定性を媒介する要因としては、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) によって親の感受性が取り上げられ、上記の van IJzendoorn (1995) は、親の愛着に関する心的状態と子どもに対する親の敏感な反応性との関連を報告している (10 研究で 389 組の親子、効果サイズは $d=.72$)。しかし、親の感受性と子どもの愛着との間には大きな関連は認められず ($r=0.22$, 30 組の親子, De Wolff & van IJzendoorn, 1997)、世代間伝達のギャップとして、今後の研究が必要などとなっている。

前述のように、乳幼児に対する母親の感受性は、子どもの愛着の安定性を促進する要因として指摘されてきたが (Ainsworth et al., 1978)、Biringen & Robinson (1991) は、愛着に深く関係しているとされる情緒的応答性 (emotional availability) という概念を、母親自身の特性としてではなく、母子の相互作用の特性として捉えなおすことを試みている。情緒的応答性とは、母親が子にとっていかに情緒的に利用可能な存在であるかという概念である。彼らによれば、情緒的応答性という概念は、母親側の感受性 (sensitivity) と侵害的でないこと (nonintrusiveness)、子どもの側の反応性 (responsiveness) と母親を相互作用に巻き込むこと (involvement of mother) の 4 つの要素から構成されるとしている。母親が子どもの状態を敏感に覚知し働きかけなければ、子どもの側に反応する構えがあったとしてもその反応性は顕在化しにくくなるであろう。また、母親が潜在的に豊かな感受性を備えていたとしても、子どもが反応的でなければ、その

行動をうまく調整することは困難になると考えられる。

近年、母親の情緒的応答性を乳幼児の表情読みとりの観点から把握しようとする試みが行われてきた。乳児の表情認知を通し、乳児に対する感情移入ないし情緒的共感性を測定するテストとして、Robert Emde や Joy Osofsky らの研究グループはIFEEL Pictures を作成した (Emde, Osofsky, & Butterfield, 1993)。日本版 IFEEL Pictures (以下、JIFP) はその日本語版であり、日本の臨床場面での活用を目指して作成されたものである (井上・濱田・深津・滝口・小此木, 1990)。JIFP は、家庭で撮影された乳児の表情写真によって構成され、これらの乳児の表情写真に対する自由な回答に基づき、乳児に対する情緒的反応の研究が進められてきた。

平野・森・井上・濱田・滝口・深津・小此木 (1997) は、乳児をもつ母親へ JIFP を施行した結果を検討し、18 の回答カテゴリーを高頻度 (喜び、注意・疑問・驚き)、中頻度 (疲れ、怒りなど) 及び低頻度 (恐怖、嫉妬など) に大別し、さらに 30 枚の写真刺激を喜び、悲哀、怒り、眠気、疲れ、欲求、注意・疑問・驚きの 7 系列に分類している。また、母親は喜怒哀楽などの感情だけを読み取るのではなく、乳児の欲求や意図などを読み取ることも明らかにされている。

また、長屋・辻・古井・深津 (2005) は、母親と妊婦の JIFP の反応を比較し、母親群の方が妊婦群よりも乳幼児の情緒を快なものとして読みとる傾向が認められること、不快感情を刺激しやすい図版でそれが顕著なことを見いだした。さらに内容分析から、母親は表情写真から日常的な養育場面の文脈を読みとっていることが認められた。一方、妊婦は単純な注目・興味、心理的な不満感や不快感を読みとる傾向があり、他者との相互作用をほとんど読み取らないことが明らかになった。これらの結果から、母親は、出産・育児の経験を経て子どもの情緒をより肯定的にとらえ、生理状態や情緒的相互作用に対して敏感に反応するようになると考察された。また、子どもの性差や人数、年齢が母親

の情緒読み取り傾向に与える影響についても検討されており (長屋, 2005)、息子をもつ母親に比べて、娘を持つ母親のほうが受動的な情緒の読み取りが多い。子どもが一人の場合、息子をもつ母親のほうが「不満」に注意を払う傾向があり、子どもが複数の場合は娘をもつ母親のほうが受動的な情緒の読み取りが多いこと、息子を持つ母親は子どもの年齢が高くなるほど「自己主張」および肯定的情緒を多く読み取る傾向があるが、娘の場合にはそのような関係はみられないことが明らかにされている。

以上のように、乳幼児の表情の読みとりには母親としての発達や子どもに対する感受性が強く反映されると考えられる。本研究では、青年女子の愛着スタイルと乳幼児表情の認知との関連を検討するが、他者の感情・情動や表情認知と愛着スタイルとの関連について、本邦では以下の 2 つの研究が報告されている。

坂上・菅沼 (2001) は、大学生を対象として、対人様式としての愛着の内的作業モデルと意識レベルでの情動情報 (怒り、悲しみ、恐れ、喜び) の処理との関連を検討した。その結果、安定的な愛着スタイルをもつほど、自他の悲しみや喜びに対する内省や覚知が高く、回避的なほど、悲しみや喜びに対する不快感が高い傾向を示した。また、アンビバレントな人は、自他の怒りや喜びの覚知が低い傾向があることを見出した。

また、金政 (2005) は、大学生を対象に愛着スタイルと他者の表情認知に及ぼす影響を検討している。ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ感情の顔面表情刺激に対する表出の程度についての回答を、回避と不安の 2 次元による愛着尺度得点の高低に基づく 4 群間で比較した。その結果、高不安低回避群 (すなわちとらわれ型) はネガティブな表情 (ニュートラルな表情も) をよりネガティブに読み取る傾向、低不安低回避群 (安定愛着型) では表情をよりポジティブにとらえる傾向が認められ、愛着スタイルが他者の表情認知に理論的予測とおおむね一致した影響を及ぼすことが示唆された。こうした研究結果から、安定愛着スタイルをもつ女子青年は、乳幼児の表情写真に対してよりポジ

ティブな読みとりを行い、回避型やアンビバレント型の愛着スタイルの人はネガティブな読みとりを行うことが予測される。

本研究は、青年女子の愛着の内的作業モデル（愛着スタイル）が乳幼児に対する情緒的応答性すなわち表情の読み取り能力とどのように関連しているかを検討するが、愛着の内的作業モデルの測定には、まず詫摩・戸田(1988)による成人版愛着スタイル尺度を用いる。これは、Hazan & Shaver(1987)が乳幼児の愛着3分類（安定型、回避型、アンビバレント型）を青年期・成人期まで拡張した強制選択法を質問紙調査様式に変更し、愛着スタイルを特性として捉えたものである。さらに、Brennan, Clark, & Shaver(1998)の見捨てられ不安尺度と親密性の回避尺度からなる成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版(中尾・加藤, 2004)を用いる。

一般的対人関係のもち方についての照合機能を果たすと考えられる愛着の内的作業モデル(IWM)と特定の親密な異性友人に対する愛着スタイル(ECR)を測定し、乳幼児の表情写真に対する理解度を測定するために開発された日本版IFEEL Picturesを用いて、内的作業モデルや愛着スタイルがポジティブなほど乳幼児の表情理解が良好であろうという仮説を検討することが本研究の目的である。

方 法

調査対象者：T女子大学・T女子短期大学学生40名を対象とした。対象者は別の研究(安田, 2007)においてリクルートされた253名のうち、本研究の内容及び倫理的事項に許諾した者であった。平均年齢は20.5歳(SD=1.47)であった。質問紙調査は授業時に集団で行い(2006年10～11月)、JIFPは個別に実施した(2006年12月～2007年1月)。

質問紙調査：本研究では、青年期女子の愛着スタイルを測定するために、以下の2つの成人愛着測定尺度を用いた。

1. 内的作業モデル尺度 (Internal Working Models Scale: IWM, 詫摩・戸田, 1988) :

安定尺度6項目、アンビバレント尺度6項目、回避尺度6項目計18項目に6件法による回答を求めた。

2. 成人愛着スタイル尺度 (Experiences in Close Relationships inventory: ECR, 中尾・加藤, 2004) : 親密性の回避17項目と見捨てられ不安9項目、先行研究で削除された10項目計36項目で7件法による回答を求めた。

日本版IFEEL Pictures (JIFP) : 30枚の乳幼児の顔写真がブック形式に綴じられたもの、様々な表情写真によって構成された(日本IFEEL Pictures研究会, 1994)。実施の手順は、

1. 自由反応段階 (被験者にJIFPを手渡し、表情写真の感情・情緒の回答を求める)
2. 評定回答段階 (回答終了後、それぞれの写真の感情・情緒の快・不快の程度を5件法で評定を求める)
3. コーディングのための質問段階 (分類不可能・複数回答の場合に質問を行う)

の3段階でからなり、施行時間は約20～30分であった。

回答のカテゴリー分類：カテゴリー分類は、JIFP実施マニュアル(日本IFEEL Pictures研究会, 2005)に基づき2名の評定者が行った。それに基づき、①カテゴリー使用頻度、②カテゴリー使用範囲、③ポピュラー反応数、④セリフ回答数、⑤各図版に対する平均快・不快得点を求めた。

結 果

1. IWM, ECR と JIFP 各測度間の相関係数

IWM, ECR 各尺度とJIFPのカテゴリー使用範囲、セリフ回答数、ポピュラー反応数との間の相関係数を算出した。その結果(表1)、IWM安定とカテゴリー使用範囲との間に正の相関($r=.304$)、ポピュラー反応数との間に負の相関($r=-.308$)、見捨てられ不安とポピュラー反応数との間に正の相関($r=.320$)が認められた。

さらにIWM, ECR 各尺度とJIFPの系列別快不快得点との相関を求めた。有意な正の相関

が、見捨てられ不安と喜び系列との間に認められた ($r=.320$)。

表1 IWM, ECR と JIFP カテゴリー使用範囲、セリフ回答数、ポピュラー反応数間の相関係数

	安定	アンビバ レント	回避	親密性の 回避	見捨てら れ不安
カテゴリー 使用範囲	.30 [†]	.16	.07	.20 [†]	.17
セリフ回答 数	.03	.02	.19	.02	.04
ポピュラー 反応数	-.31 [†]	.16	.22 [†]	.03	.32 [*]

* $p < .05$ † $p < .10$

2. JIFP 各測度の IWM 各タイプ間比較

IWM と ECR の資料は、同時に収集された青年女子 253 名を対象としたデータを分析した各下位尺度の記述統計に基づき、対象者の標準得点を求めた。IWM 各尺度標準得点の正負を基準として分類したところ (特定の下位尺度が正で他が負、特定の下位尺度が +1 以上であること)、安定型 9 名、アンビバレント型 10 名、回避型 6 名、アンビバレント/回避型 5 名、混合型 9 名となった。JIFP 各測度についてタイプ間の分散分析を行った結果、カテゴリー使用範囲が有意であり ($F(4,35)=2.851, p<.05$)、多重比較より安定型がアンビバレント型よりも多いことが認められた (図 1)。またポピュラー反応数では、怒り系列が有意傾向であり、アンビバレント型よりも混合型が少ない ($F(4,35)=2.459, p<.10$ 、図 2)。さらに、悲哀系列にも有意傾向があり、アンビバレン

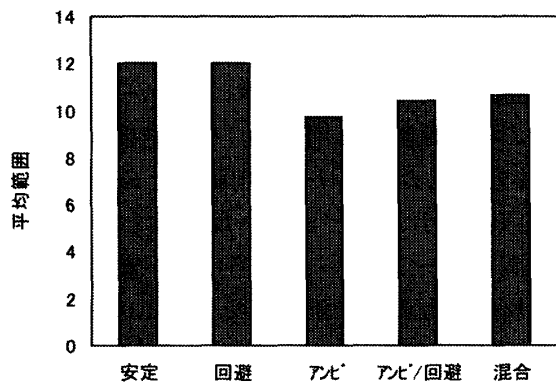


図 1 IWM タイプ別のカテゴリー使用範囲数

ト型よりも回避型が少ないことが認められた ($F(4,35)=2.341, p<.10$ 、図 3)。

各写真図版の快—不快評定については、まず喜び系列 7 番で回避型が安定型、混合型よりも快ではないこと ($F(4,35)=3.169, p<.05$)、喜び系列 21 番で回避型が混合型よりも快ではないこと ($F(4,35)=2.805, p<.05$) が認められた。さらに、注意・疑問・驚き系列 18 番が有意傾向であり、回避型が安定型よりも快と感じる傾

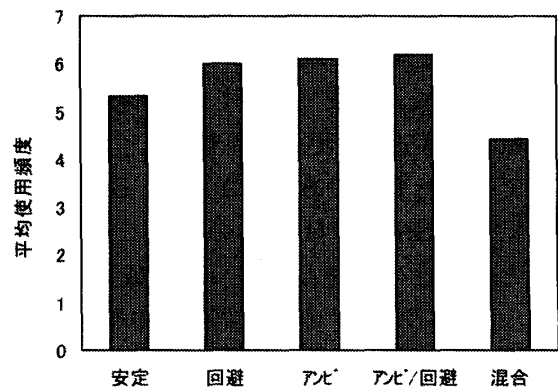


図 2 IWM 各タイプにおける怒り系列のポピュラー反応数

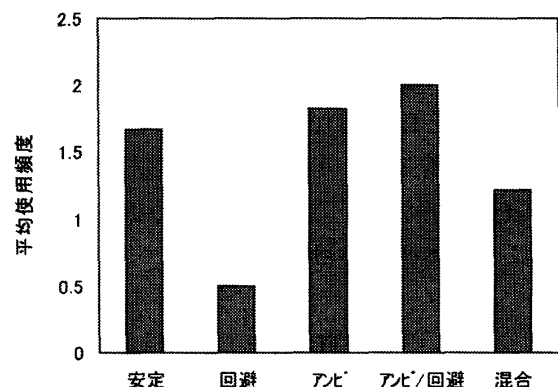


図 3 IWM 各タイプにおける悲哀系列のポピュラー反応数

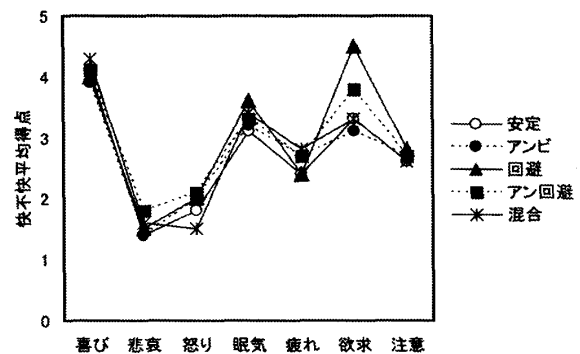


図 4 IWM タイプ別の各系列快不快得点の比較 (非常に快を 5 とする)

向が認められた。

系列別に見ると、怒り系列で有意な傾向が認められ ($F(4,35)=2.459, p<.10$)、混合型がより不快と評定していた (図4)。

3. JIFP 各測度の ECR 各タイプ間比較

同様に ECR 両尺度標準得点の正負によって (両尺度が正の場合恐怖型、親密性の回避のみが正の場合回避型、見捨てられ不安のみが正の場合とらわれ型、両者が負の場合自律型と分類)、自律型7名、回避型9名、とらわれ型5名、恐怖型18名に分類した。

分散分析の結果、セリフ回答数が有意傾向であり、自律型が多いことが認められた ($F(3,36)=2.292, p<.10$ 、図5)。

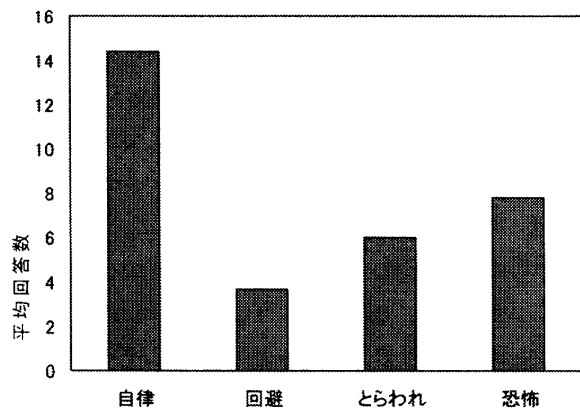


図5 ECR タイプ別のセリフ回答数

各写真図版の快-不快得点では、怒り系列17番が有意であり ($F(3,36)=4.407, p<.05$)、恐怖型よりも自律型の方が不快と感じていた。また、注意・疑問・驚き系列の8番も有意であり ($F(3,36)=3.803, p<.05$)、恐怖型よりも回避型の方が快と感じていることが認められた。

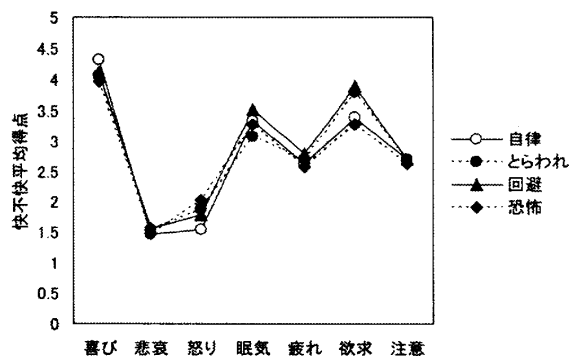


図6 ECR タイプ別の各系列快不快得点の比較

($F(3,36)=3.169, p<.05$)。

系列別に見ると、喜び系列で有意な傾向が認められ ($F(2,516), p<.10$)、自律型が恐怖型よりも快と評定した (図6)。

考 察

まず全体として、快な写真に対する反応のカテゴリーは、先行研究によって示されたポピュラー反応のカテゴリーと一致していた (日本IFEEL Pictures 研究会, 2005)。しかし、不快な写真や快・不快のどちらともいえないあいまいな写真に対しては、例えば「悲哀」を「怒り」と読み取るなど、基準集団のポピュラー反応のカテゴリーとは一致しないものも認められた。これは本研究の被験者の多くが大学生であり、普段乳幼児と接触する機会が少ないことによるものと考えられる。

本研究で愛着スタイルの測定に用いた IWM と ECR は、前者が一般的な対人関係の参照枠という作業モデル、後者は特定の対象 (本研究においては親密な異性の友人) に対する愛着関係の作業モデルという違いはあるものの、理論上はパラレルな関係にある。Collins & Read (1994) の階層的ネットワークモデルによると、前者は「常時アクセス可能なモデル」、後者は「一時的にアクセス可能なモデル」を反映すると考えられるが、本研究での乳幼児の表情認知の測度においても類似した結果が得られた。

すなわち相関分析から、IWM が安定なほどカテゴリー使用範囲が広く、ポピュラー反応が少ない。また回避的なほどポピュラー反応が少ない。また ECR でも、見捨てられ不安が高いほどポピュラー反応が多いことが認められた。また同様に、タイプ別比較からも、IWM の安定型のカテゴリー使用範囲が有意に多いことが認められた。

アンビバレント傾向、低回避・高不安が強いほどポピュラー反応が多く、安定的、回避的であるほどポピュラー反応数が少ないということは、安定的な愛着であると乳幼児の表情の読みとりが正確さに欠けるともいえるかもしれ

ない。情緒的応答性をカテゴリ使用範囲が狭くポピュラー反応が多いことととらえると、安定的な愛着傾向をもつ女子青年は情緒的応答性という面では低い傾向があることになる。しかし一方では、愛着の作業モデルが安定的であるほど乳幼児の表情認知が多様で、柔軟性をもつとも考えられよう。これは、妊婦と比較すると、母親は育児の文脈を反映した多様な反応を示すという報告とも整合的である（長屋他、2005）。

さらに本研究では、乳幼児の表情写真に認められる感情を一つ回答するように求めているが、ECRの自律型でセリフ回答数が多いという結果が得られた。安定的な者ほど、教示にとられずに乳幼児に同一視しやすい傾向があるといえよう。また、乳幼児との関わりを持つ母親は、大学生に比べて、自己主張や欲求といった乳幼児のニードや意図に関する回答が多いことが報告されている（平野他、1997）。養護性が高いことや安定愛着であることは、乳幼児の表情刺激に対して、感情の読み取りにこだわらず、表情の発生した文脈、乳幼児の動機づけや意図などの多様な帰属を行うと考えられる。

最近、愛着の安定性と心の理論獲得との関連性が指摘され、その媒介変数として乳幼児を心的世界を有する存在とみなし、心的帰属をする傾向である mind-mindedness (Meins Fernyhough, Wainwright, Clark-Carter, DasGupta, Fradley, & Tuckery, 2003) が取り上げられている。これは本邦においても、VTRを用いた測定法が考案されており（篠原, 2006）、心の理論ばかりでなく安定愛着の形成要因としての作用も検討する必要がある。

写真図版の快-不快評定については、IWMの回避型が喜び系列に対して快と評定する傾向が低いこと、ECRの自律型が怒り系列をより不快と評定する傾向が見られ、金政（2005）や坂上・菅野（2001）の結果とは一致しない部分も認められたが、安定愛着傾向であるほど表情写真に対して快・不快をはっきりと表出することが示唆された。

小原（2005）は、JIFPの乳幼児表情写真に

対する快-不快評定得点と育児困難感および情緒的共感性の関連を検討し、0歳児をもつ母親には関連が見られないが1歳児では育児困難感との正の相関を見いだした。これは子どもとの相互作用の積み重ねによって情緒的応答性の個人差が表われることを示唆している。愛着スタイルと情緒的応答性に予想していたほど顕著な関連が見られなかった原因は、本研究の研究協力者が子どもとの接触経験の少ない女子大学生が大半を占めたためと思われる。

本研究では、愛着の世代間伝達の媒介メカニズムとしての乳幼児に対する情緒的応答性の指標としてJIFPを用い、愛着スタイルとの関連を検討した。今後、同様の方法を用い母親を対象として検討するとともに、実際の母子相互作用との関連を検討することが必要と思われる。さらに、不安定愛着の傾向をもつ母親や子育てに不安感やストレスを感じている母親を対象とした、愛着理論に基づく親子関係の介入プログラムが開発され、実践がすすめられている。例えば、Cohen, Muir, Lojkasek, Muir, Parker, Barwick, & Brown (1999) の「Watch, wait and wonder」技法は、子どもを母子相互作用の主導者であると捉え、セッションの前半で、母親は子どもを見守り、子どもが行なう活動をそのまま受け入れることに費やされる。後半において、子どもが主導した遊びの観察や体験を話し合う。こうしたセッションをとおして、母親は乳幼児に対する内省的機能を形成・回復し、子どもの愛着の安定性をもたらすことが認められている。こうした子育て支援介入プログラム構築の基礎資料として、乳幼児との接触経験や保育実習、乳幼児のVTR視聴等によって、大学生のJIFP反応が変化するかどうか、情緒的応答性が変容されるかどうかを検討することも必要であろう。

註

- (1) 東海学院大学大学院研究生。本論文は第二著者の平成18年度東海女子大学修士論文の資料を再分析したものに基いている。

Summary

The purpose of this study was to investigate the relationships between attachment styles of female university students and their emotional availability to infants. Attachment styles were assessed by two questionnaires of attachment internal working models (IWM and ECR) and emotional availability was assessed by Japanese edition of IFEEL Pictures (pictures of infants' facial expressions). Range of used categories was correlated positively and number of popular responses was correlated negatively to secure scores. Anxious individuals showed more popular responses to infant facial expressions. These results suggested that young female adults with secure attachment have the readiness to read emotions and motivations of infants more flexibly.

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978) *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- J. ボウルビィ (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1980) 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版 (Bowlby, J.(1973) *Attachment and loss. Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.)
- Brennan, K.A., Clark, C.L., & Shaver, P.R. (1998) Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J.A.Simpson & W.S.Rholes(Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press. Pp.46-76.
- Biringen, Z., & Robinson, J.L.(1991) Emotional availability in mother child interaction : A reconceptualization for research. *American Journal of Orthopsychiatry*, 61, 258-271.
- Cohen, N., Muir, E., Lojkasek, M., Muir, R., Parker, C., Barwick, M., & Brown, M. (1999) Wach, wait and wonder: testing the effectiveness of a new approach to mother-infant psychotherapy. *Infant Mental Health Journal*, 20, 429-451.
- Collins, N., & Read, S. (1994) Cognitive representations of adult attachment: The structure and function of working models. In K.Bertholomew & D.Perlman(Eds.), *Advances in Personal Relationships: Vol. 5. Attachment Processes in Adulthood* (pp.53-90). London: Jessica Kingsley.
- De Wolff, M., & van IJzendoorn, M. (1997) Sensitivity and attachment: a meta-analysis on parental antecedents of infant attachment. *Child Development*, 68, 571-591.
- Emde, R.N., Osofsky, J.D., & Butterfield, P.M.(1993) *The IFEEL Pictures: A New Instrument for Interpreting Emotions*. International University Press.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987) Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 平野直己・森さち子・井上果子・濱田庸子・滝口俊子・深津千賀子・小此木啓吾 (1997) 日本版 IFEEL Pictures 母親への施行結果からの特徴の検討. 心理臨床学研究, 15, 144-151.
- 井上カーレン果子・濱田庸子・深津千賀子・滝口俊子・小此木啓吾 (1990) 乳児の写真から情緒を判断する能力の測定. 家族療法研究, 7, 30-40.
- 金政祐司 (2005) 自己と他者の信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響—成人の愛着的視点から— 心理学研究, 76, 359-367.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003) 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, 74, 466-473.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985) Security in infancy, childhood, and adulthood: a move to the level of representation. In I.Bretherton and E.Waters(Eds.) *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development 50* (1-2, Serial No.209), 66-104.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Clark-Carter, D., DasGupta, M., Fradley, E., & Tuckery, M. (2003). Pathway to understanding mind: Construct validity and predictive validity and

- maternal mind-mindedness. *Child Development*, 74, 1194-1211.
- 宮本邦雄 (2006) 女子大学生の内的作業モデルと宗教意識・ストレスコーピング・抑うつに関連 東海女子大学紀要, 25, 101-108.
- 長屋佐和子・辻佐知子・古井景子・深津千賀子 (2005) 母親と妊婦の日本版 IFEEL Pictures 反応の比較検討 東海心理学研究, 1, 30-38.
- 長屋佐和子 (2005) 乳幼児表情写真 (IFEEL Pictures) を用いた母親の情緒応答性の測定: 子どもの性差・人数・年齢が与える影響 発達心理学研究, 16, 156-164.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004) 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 75, 154-159.
- 日本 IFEEL Pictures 研究会 (1994) 日本版 IFEEL Pictures (図版)
- 日本 IFEEL Pictures 研究会 (2005) 日本版 IFEEL Pictures (JIFP) 実施マニュアル
- 小原倫子 (2005) 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連 発達心理学研究, 16, 92-102
- 坂上裕子・菅沼真樹 (2001) 愛着と情動制御—対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連— 教育心理学研究, 49, 156-166.
- 篠原郁子 (2006) 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発—母子相互作用との関連を含めて— 心理学研究, 77, 235-252.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988) 愛着理論から見た青年の対人態度—成人愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- van Ijzendoorn (1995) Adult attachment representations, parental responsiveness, and exploration: a meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, 117, 387-403.
- 安田 藍 (2007) 青年期女子における母性意識と乳幼児表情の認知 平成 18 年度 東海女子大学修士論文